
福生自然観察グループの歩み

伊 東 静 一

1 自然観察グループのはじまり

今から20年程前のことです。一九七三年（昭和48年）の1月15日に成人式を終えた数人の男女が、市民体育館の和室に集まって「サークル活動」を始めようと話し合いをしていました。

当時の成人式は二部構成で、一部は完全な式典でした。二部は成人式を迎える青年が「成人式実行委員会」を作り前年の秋から内容や式の進行などの段取りを決め、当日の進行や運営を成人者自らが主体的に進める成人式でした。

また、その成人式実行委員会とは別に、成人式を迎えた者には教育委員会の社会教育係から、「成人式を契機に同じ年令の仲間です」という内容の通知が送られていました。それは、「高度成長期を通して孤立している青年が増えていた

ため、同じ世代の人間同士で話し合いをしたり、一緒に活動したりする機会を教育委員会が作り、新たな文化活動を援助しようということだったと思います。当時の青年は純情というか人恋しかったのか、教育委員会からの誘いについた15人くらいの青年が、毎週集まっていました。また、当時の青年達は集団で何かすることの楽しさも知っていましたし、現在のようにファミコンやビデオデッキなどを持っている者などなく、個人的に遊べるような場所や機会が多くはありませんでした。

一九七三年（昭和48年）当時、福生市には現在のような公民館はなく、青年達の活動は教育委員会の社会教育係職員が援助していました。私たちはその職員たちに手助けされたりしてヨチヨチ歩きを始めたところでした。

さて、約20年前に「サークル活動」を始めた青年達は具体的な目標を見いだせず、また、具体的な活動に入れない

まま一年が過ぎてしまいました。

そして一九七四年（昭和49年）の2月、伊東が当時「日本野鳥の会」で観察指導していた岡田紀夫氏と市内の玉川上水沿いの道で偶然出会い、高校の恩師でもあった岡田氏に、現在の福生の青年の様子やサークル活動を通しての関心事を話し、野鳥の観察会を開いたら指導してもらえると伺ったところ、快く承知してもらいました。そして、その年の6月に五日市町の臼杵山で福生市民対象の野鳥観察会を開くことが出来ました。

この観察会には、当時の社会教育係で現在の公民館職員2人が参加し、多方面で援助してもらいました。

市民対象の初めての野鳥観察会には、多くの市民が参加してくれました。結果的には、この観察会参加者を中心に現在の自然観察グループが生まれたわけです。

20年を振り返ると、発足当時の青年は中年になってしまいました。今日まで続けてこられたのは、青年だけで固まることなく幅広い市民層の参加があって、青年も大人の方々に色々なアドバイスを受け、それを吸収することが出来たからではないかと思っています。

さて、五日市の臼杵山での野鳥観察会以降、福生で観察している人がいることに気がついて、その方々と新たな関係が出来てきました。

当時の熊川には、福生市立第5小学校理科教諭の栗原仁

氏が、児童対象に精力的に愛鳥活動をおこなっていました。また、熊川在住の石川操子さんが「小鳥のおばさん」と呼ばれ、自宅を開放して福生市立第5小の愛鳥クラブの子とも達と関係を持ち、定期的に観察を行っていたのです。しかも、石川操子さんに岡田紀夫氏が定期的にやってきていましたので、内容的には素晴らしい観察指導がされていたのです。

小学生に地域の野外を利用した自然教育（現在では環境教育と呼ばれるでしょう）を行っていた理科の教諭と、野鳥の調査や観察指導を広域的に行っていた専門家の岡田紀夫氏、そして関心のある子どもと専門的な大人が出会う場Ⅱ地域の拠点としての石川操子さん、この素晴らしい人間関係が出来ている中へ青年達は新たな関係を結んでいくのですが、これは驚くほど簡単でした。これも、熊川地域に住む人の力が大きかったのではないかと思っています。

2 自然観察グループの初期の活動

青年サークルを母体として始まった観察グループも、一九七四年6月（昭和49年）の野鳥観察会以降、実質的に野鳥を中心としながらも自然保護を目指す市民グループとして方向を定めつつありました。しかし、実際の活動というものは、一九七五年と七六年に行われた市民対象の観察会や青年サークルのメンバー中心での富士山観察などを通し

て、観察グループとしての骨格が固まってきました。
ここでは、その初期の2年間の内容についてふれます。

一九七五年（昭和50年）2月、現在公民館で開かれている「自然観察会」が、当時の社会教育係の主催事業として開かれるようになりました。現在、三多摩各市を見ても社会教育行政として自然観察会を開き、そして今日まで継続しているというような市町村はほとんどないと思います。

当時の職員の先見の明といえますか、時代を見る目というものの確かさを感じます。ただし、社会教育行政の行なう観察会が一般の自然保護団体が行なっている観察会と同じであるということではありませんし、どちらか一方がよくて他方が悪いということでもありません。どちらにも一長一短があると思っています。

さて、その自然観察会は野鳥を中心に観察を始めたわけですが、白杵山の観察会に参加した人はもちろん、青年達も積極的に参加していました。

しかし、当時の青年は環境問題から見た「野鳥」であり、多分に社会的なテーマから野鳥を見ていました。というのは、当時は公害問題がかなり大きな問題となっていたわけです、その意味では社会問題に敏感な青年の感性というか、当然の関心事だったように思えます。

当時の青年の観察の視点というものは、「理念先行」といえるものでしたが、野鳥観察を通して福生の環境を見つ

め、市民が市民に出来るレベルや方法で観察記録を残し、そしてデータを基によりよい自然環境を、保護利用しているという思いがあったことは事実です。そのことをどのように実現していったらよいかということ、当時の青年達は大人達の多方面からの力を貸してもらいながら、市民対象のいくつかの観察会を開いていきました。
福生で野鳥観察会として始まった一九七五年（昭和50年）には、青年サークルとしていくつかの観察会を主催しました。

前年の6月に白杵山で開いた観察会はいわば勢いで開いたようなものですが、約半年過ぎて冬鳥の観察会が過ぎたころには青年の方も少し学習していましたので、岡田紀夫氏の指導のもと市民対象に次のような観察会を連続して開いていました。

4月13日 御岳山野鳥観察会

6月15日 富士山御中道野鳥観察会

7月6日 軽井沢野鳥観察会

7月13日 富士山野鳥調査（当時自然観察をしていた
人数人で）

8月3日 富士山野鳥調査（当時自然観察をしていた
人数人で）

10月 柳山公園で野鳥観察会

12月7日 市内冬鳥観察会

前記の他にも青年達は以下のように登山や毎週1回夜間に会合を開いていました。

3月19日 三頭山登山

5月11日 鷹ノ巣山登山

11月2日 夜叉神峠登山

11月9日 三頭山登山

11月24日 奥秩父国師岳登山

一九七五年は、青年サークルとして自分達の求める方向がはっきりしてきたのと、サークル以外の人との交流が開かれ、活動範囲が広がり頻繁に市民対象の観察会や自分達のために富士山に調査などに出かけました。

市民対象の観察会、特に富士山や軽井沢といった遠くの観察会は、参加者を広報で募集し大型バスを借りて出かけました。これらの観察会の資料作りや当日の運営などは青年達が主体的に行ってきたわけですが、野鳥を含めた自然の仕組みや働きなどについての説明は、岡田紀夫氏と栗原仁氏にお願いしている状況でした。

この年は非常に多くのことを行って新たな仲間を得ることが出来ました。これらの活動を通して青年のメンバーの中に自分が求める方向が違うという意見が出はじめ、11月の下旬には発足当初の青年サークルとしての活動はな

なり、小学生から大人までの市民を主体とした「自然観察グループ」として、実質的な活動を始めていました。

〔自然観察グループの初期の中心的な活動から〕

一九七五年（昭和50年）には数多くの市民対象の自然観察会を開きました。毎回の観察会には大型バス一杯の参加者があり、我々は単純に喜んでいたのでです。

このような観察会は翌年の一九七六年にも以下のように開きました。

5月9日 三頭山野鳥調査（ラインセンサス法による生息状況調査Ⅱグループのみ）

5月16日 富士山野鳥観察会（市民対象）

6月15日 富士山野鳥観察会（市民対象）

10月 富士山植物観察（グループのメンバーのみ）

10月 三頭山植物観察（グループのメンバーのみ）

富士山観察会では広報で募集記事を出したために、観察会の参加申込みが集中し、日常的に市内で観察している仲間が抽選の結果参加できず、ハイキング気分の市民が参加するという事態が起きました。そこで参加出来なかった仲間を中心に、市外での観察会の意味とは何かということで、意見が分かれるようになりました。

特に、☆ 日常的に観察していない地域に大勢でいく意

味がどこにあるのか

☆ 観察ということを通して仲間が増えていくの
に、その仲間が参加できない観察会はあまり
意味がないのではないか

などという意見が表面化し、大勢は市外での観察会に重
きをおくのではなく、地味ではあるが市内の自然の変化を
市民が記録していくという方向性を確認しました。

自然観察とかバードウォッチングなどという言葉が市民
権を持っていなかった当時には、野外で自然観察する人は
少なく、観察仲間というものはっきりわかる時代でした。

前述のように、日常的に観察している仲間なのに富士山
や軽井沢などに観察に行けなかった人も含めて、徐々に観
察する仲間の関係が深くなってきました。そしてこの年の
秋から、観察グループのメンバーだけで富士山に行くよう
になりました。前年にも仲間数人で出かけてはいたのです
が、この年の秋には中学1年生の参加もあり、観察グルー
プとして実質的な富士山通いが始まりました。

また、5月には三頭山の三頭大滝コースを利用した野鳥
生息状況調査を始めましたが、この調査は今日でも続けて
います。毎年、同じ時期に同じコースを同じ方法でほとん
ど同じ人が調査していますので、約15年の野鳥の増減につ
いても見当がついています。

一九九一年(平成3年)夏、大雨によって三頭山の三頭

大滝コースが大きなダメージを受けてしまい、地形も林の
様子も大きく変化した部分があります。あと数年同じ調査
を続ければ、大雨以前のコースと以後のコースでの野鳥の
増減ということがわかるかも知れません。

一九七六年(昭和51年)暮には、完全に市民のサークル
になり、自然観察と一緒に始めた青年は2人になっていま
した。

3 安定期の活動

〔富士山の観察〕

青年2人と広範囲の市民が一緒になった福生自然観察グ
ループとしての活動は、一九七五年(昭和50年)から一九
八二年(昭和57年)10月まで、富士山五合目から三合目間
の野鳥の調査(ラインセンサス法)や観察に何度も出かけ
ました。それから、夏や秋に富士山の寄生火山に登って植
物の観察をしたり、また地図とコンパスの使い方の実践的
な練習などをしてきました。

現在では四輪駆動車で林道を走るようになってくるよう
ですが、我々は林道の途中まで車で行って、後はほとんど
歩いて見て回りました。というのは、当時利用していた車
では林道の奥までいくことが出来なかったこともありま
す、地図に記載されていない道を求めて尾根を歩いたり地
図上の寄生火山の頂上を求めて歩き回っていたからです。

また、野鳥や植物などを見て歩くには、徒歩が一番適しているということもわかっていました。

その他にも、富士山の寄生火山の中でテントを張って一夜を過ごし、寝ているテントのすぐ上をヨタカが飛んでいるのを観察したりもしました。また、寄生火山の頂上を目指す時や昔登山者が利用していた道を再発見するために、原生林の中を地図とコンパスを利用して歩き回ったりしました。

一九七八年（昭和53年）の7月9日（日）には、明治大学の宮岡教授に富士山の観察会に初めて同行していただき、フジハタザオなどの富士山特有の植物やそれらの生息状況など、富士山のことを詳しく教えていただきました。

その他にも、青木ヶ原樹海の中で進む方向がわからなくなったり、ヤマネのかわいらしい姿に見とれたり、全く歩くことも出来ないような笹の中を頂上目指して1時間以上もヤブコギしたり、寄生火山の頂上を探しているうちに霧にまかれ進路がわからなくなり、コマツガの大木に登って霧がはれる僅かな時間に進路を探したり、富士山には多くの思い出を残しています。

しかし私達は、一九八二年（昭和57年）10月17日を最後に富士山には行かなくなりました。観察グループとして富士山に行かなくなったのには二つの理由があります。

一つは、私達が行きだした頃の富士山に比べ、現在では

多くの人が車を利用し、林道の奥や立入禁止区域まで行くことによって、地元の方々のトラブルが多発していることがあるからです。具体的には、萱場に四輪駆動車で乗り込んで萱をなぎ倒してしまったことなどです。そのために現在では走行規制のある林道があると聞いています。

もちろん、私達も車で行ったので他人を非難することは出来ませんが、萱場を共同で管理している地元の方々にとってはその場所が生産の場であり生活の資源であるわけです。私達はその場に「学習」として出かけても、結果的に損失を与えることになっては、本当の意味での自然保護にはならないのではないかと考えるようになっていました。

もう一つの理由は、富士山の自然の素晴らしさは昔も今も変わらず学ぶものが多いと思いますが、自分達には福生という素晴らしいフィールドがあります。そのフィールドを充分理解してからでも遅くはないような気がしています。もちろん、富士山を専門に調べている方々がいることは承知しています。また、現在の私達には富士山を調べつくすだけの力はまだ備わっていないとも考えています。

〔三頭山〕

三頭山には、一九七三年（昭和48年）5月に奥多摩有料道路（現在は奥多摩周遊道路）が完成し、徐々に登山者が多くなったとはいえ、一九七三年（昭和48年）当時の大滝

周辺や大滝を経て三頭山頂上に至る道は、ブナ・シオジ・サワグルミの大木が生い茂り、また、カエデの種類が多く紅葉の美しい山でした。今でもその雰囲気が残ってはいませんが、一九九〇年（平成2年）に開園した「都民の森」によって、そして、一九九一年（平成3年）夏の大雨によって大きく雰囲気が変わってしまった部分があり、現在の段階でははっきりしたことは言えませんが、野鳥の種類数にも変化がおきているように感じています。

三頭山には野鳥の調査のために頻繁に通いましたし、今でも年間数回出かけていきます。三頭山を観察の対象として選んだのは優れた自然環境が残っていたからで、特にブナの原生林が見られることが最大のポイントでした。

三頭山では5月の連休後頃に素晴らしい新緑が見られ、その中の野鳥達のさえずりが素晴らしい朝早くから何が鳴き出すのか期待して、じっと山小屋の中で待っていたことも何度もありました。また、秋の植物の紅葉が見事なこととキノコがたくさん観察できましたので、一日中楽しく過ごすことが出来ました。そして、冬には雪に埋もれた道の中に、兎の足跡や他の動物のフンなどが見られたり、また、冬鳥のアトリが大量に見られたりと、一年中楽しめる山です。観察グループとしての活動を初める前からこの山が好きだったこともあり、野鳥に関心を強くした頃には、自然に三頭山の野鳥の生息状況を調査してみようというこ

とになりました。

〔野鳥生息状況調査Ⅱラインセンサス法〕

一九七六年（昭和51年）5月9日、岡田紀夫氏の助言で三頭山で野鳥を調べてみようではないかということになり、岡田紀夫氏が行ってきたラインセンサス法を教えてくださいながら、初めて野鳥の生息状況調査を行いました。

当時の野鳥の観察仲間は、観察ということはしても観察データを統計処理する方法なども知らず、また、その結果からどのようなことが考えられるかという、ある意味での学問的な知識や経験がありませんでした。

その後この調査はほとんど毎年行なわれています。5月の連休後の土曜日に登山し、日曜日の午前6時頃から大滝コースを下山しながら野鳥の生息状況調査を行なっています。一九九一年（平成3年）夏の大雨による被害の前後の記録として、今後貴重なものになると考えています。

〔野生鳥類標識調査Ⅱバンディング〕

三頭山ではラインセンサス法による野鳥の生息状況調査のみ行っていたわけですが、一九八六年（昭和61年）5月10日から野生鳥類標識調査Ⅱバンディング調査も始めました。

この調査は特殊な調査方法で一般の方にはほとんど目に

ふれることがないと思いますが、具体的に言えば野鳥を捕獲し足輪をはめて放し、野鳥の生態（年齢・生殖・渡りルート）の解明など）を調べる調査方法で、野鳥に関する特別な能力と技術が要求されていますので多くの人が係わっていることはありません。そのため、野鳥の観察をしている人の中にもこの調査が行なわれていることを知らない人がたくさんいます。

私達は岡田紀夫氏がこの調査に関する資格を持ち長年調査活動を行っていましたので、その調査を手伝ってきたのです。そして、前述のように一九八六年（昭和61年）から三頭山でもこの調査方法による野鳥の調査を行なうようになりました。秋から冬にかけて渡ってくる冬鳥のバンディング調査もおこなったりしています。

三頭山での調査記録は、一般には公表していません。これらの記録はまだ途中の段階であることと、「データの一人歩き」を恐れるためもあります。そして、私達はデータを残すために活動をしているわけでもないからです。

〔多摩川〕

一九七五年（昭和50年）に初めて開かれた野鳥観察会（当時は福生市教育委員会社会教育課主催）は、今から思うと当然のことですが市内の河原を利用しての観察会でした。以来、多摩川は私たちにとっては欠かせないフィールド

ドとなっています。

最初の観察会以降、福生市として開く自然観察会は現在は公民館が引き続き開いています。現在では野鳥観察だけでなく植物や水生昆虫、そして鳴く虫の観察会というように季節に応じて一年中開かれています。

あたりまえのことですが、これらの観察会は身近な自然の成り立ちや私達の日常生活との関係を考える機会として実施されていますので、あえて、市内の公園や川原で開かれています。

野鳥観察会がきっかけとなって今日まで続いている自然観察会ですが、自然観察グループとしてはこれらの中の野鳥観察会についての資料作りや指導・援助をしてきました。特に、今日の野鳥観察会では、観察グループの若い世代のメンバーが直接市民の方に説明を行っています。

4 最近の活動から

最近の観察グループの活動としては、観察グループのメンバーだけの観察や調査を頻繁に行なっています。一九九二年（平成4年）の正月から始めた観察グループのメンバー対象の定期観察会は、公民館が観察会を開かない時期に実施し、常に関心のある人々と一緒に観察や調査を行っています。また、これらの観察会は島田高広氏と榎本隆氏が中心になって企画立案し、案内を作成し呼びかけています。

また、現在環境庁の北海道層雲峡のレンジャーをしてい

る中島慶二氏が、ヨーロッパの環境保護政策の実態などを調査してきた時や、伊東や岡田紀夫氏がイギリスやアメリカでの環境教育の勉強から帰ってくると、観察グループのメンバーでその様子を聞き、実際の環境問題についての今後の対応方法についての勉強や、関心のある市民層を拡げようという配慮をしています。そして、野鳥だけではなく植物の観察や植物図鑑の中に書かれている語句についての学習会も開き、フィールドだけではない学習も深めています。

少し大げさに言えば、市民が市民の立場で地域を科学的データをもとに深く理解し、よりよい地域を自然の側面から考え作り出していくために、目立たない努力を重ねています。

以下には、一昨年（一九九二年）の2月から12月までの間、榎本隆氏が同じ区間で1年間通して野鳥を観察しその記録を残しましたので、その記録を掲載します。この記録は現在の多摩川でも1年を通して観察すればこのくらいの種類の野鳥を観察出来るということを示しています。榎本氏もいうように、ある区間だけを観察しているため、市内でも他の種類の野鳥を観察している人もいると思いますが、一応の目安にはなると思います。また、約10年前には島田高広氏も冬の期間に昭和水堰で冬鳥の観察記録を残していますが、紙面の都合上今回は榎本氏の記録のみを掲載し

ます。

〔榎本氏の説明〕

この記録は、一昨年（一九九二年）の2月から12月までの間、多摩川の五日市線の鉄橋から昭和水堰の下流で通称「赤土」と呼ばれている所までの記録です。

私は野鳥の観察を始めて5年ほどですが、福生市近辺でどんな鳥がいつ頃見られるのかを知るために記録をつけ始めました。これを思いついたのが一昨年の2月で、また12月上旬は都合で観察出来なかったため、1月と12月上旬の記録がありません。

表の中の「上中下」とはその月の上旬、中旬、下旬の意味で、1日～10日が上旬、11日～20日までが中旬、21日～末日迄を下旬としました。

とりあえず1年間観察をして来たのですが、記録を残したのが自分の設定した観察エリア内だけなので、福生市内ではここに記録されていない鳥を観察した人もいると思います。また声を聞いただけでは記録していません、見て確認出来た種だけを記録しました。

昨年、私が初めて多摩川で観察した鳥は、アリスイ・オオタカ・カケス・キアシシギ・クサシギ・ゴイサギ・セイオウチョウ・タカブシギ・チゴモズ・トウネン・ノビタキ・バン・ヒバリシギ・ミヤマホオジロでした。また、こ

の他にもハクチヨウやジシギの仲間も見られました。

昨年観察した中で「セイオウチヨウ」と言う鳥がおります。これは後でわかったことなのですが、アフリカ産の鳥で、日本では「キマユカナリア」と言う名前です。ペットショップで売られている「籠抜け鳥」だそうで、厳密に言うとな野鳥とは言えないかも知れません。しかし、多摩川で見たと言う記録として残しておきたいと思えます。

ほぼ1年間で約70種類以上（日本で見られる鳥の数、約五百種）の鳥が福生市近辺で見られるなんて、すごいなあと思えました。一昨年見られた鳥たちが、また今年も見られることを願いながら、福生近辺で今年も観察をしていきたいと思えます。

5 将来に向けて

自然観察グループとしての歴史を自画自賛するわけではありませんが、この約20年の間に生まれたものは、わずかな観察資料と素晴らしい人間関係でした。この20年間は文字どおりあつという間の出来事でした。自然観察グループの歴史は、地域の人間を育ててきた歴史です。地域の専門家が社会教育的視点をもち、市民を育てるために惜しみなく力を貸してくれた事が、福生の人の力のすごさを物語っています。

というのは、現在自然観察グループ内で「野生鳥類標識

調査」を行うことのできる人間が増え、より専門的で内容の濃い地域資料を残す可能性が高まってきたからです。大学の研究室レベルではなく、一般市民が市民同士の学び合いの中から専門的な力を身に付けてきたことは、市内に住む人の力により豊かな地域を作っていくために欠くことのできないことだと思えます。言葉を言い換えれば、自治そのものだからです。その意味では、宮岡教授や栗原教諭、そして岡田紀夫氏や観察を通して若い世代を育ててきた地域の大人の方々の、福生市民に果たした役割は言い尽くすことが出来ないくらい大きいと感じられます。

前述のように、岡田紀夫氏の他、伊東も環境教育に関心を持ち、先進国であるイギリスやアメリカから多くの事を学んでいる最中であり、また実践しつつあります。そして、環境という広い視点で野鳥や身近な自然を観察・記録し、専門的な力を身に付けた一市民が、次の世代に何をどのように伝えていくべきなのかを真剣に考え実践すべきだと話し合っています。今後は、小さなグループですがそれぞれ専門の力を出し合って、福生の自然観察は面白いといわれるような、そんな内容のものを作っていきたいと思えます。そして、以下に全く根拠がないわけではない、ちょっと先の夢のような話しをおきたいと思えます。

第1表 多摩川五日市線鉄橋下流の野鳥観察記録

観察月	2		3		4		5		6		7		8		9		10		11		12				
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
アオサギ		○	○		○	○										○	○		○				○	○	
アオシ		○	○		○	○													○	○				○	○
アカハラ			○																						○
アマツバメ						○																			○
アリスイ																									○
イカルト ^リ			○		○	○		○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○				○	○
イソジギ				○	○	○		○	○	○	○	○	○			○	○	○		○	○			○	○
イワツバメ					○	○		○	○			○	○	○						○	○			○	○
ウグ ^イ ス			○			○					○	○	○	○					○						
オオタカ														○											
オオヨシキリ								○	○	○	○	○			○										
オカヨシカ ^モ		○	○		○	○		○	○											○	○			○	○
オナカ ^カ モ			○		○	○			○	○	○	○	○	○	○				○			○	○	○	○
オナカ ^カ モ		○	○		○	○			○	○										○	○		○	○	○
カイツ ^リ		○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	○
カス																									
カシラタ ^カ			○	○																					
カ ^コ ウ										○															
カ ^カ モ		○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
カウ					○	○																			○
カ ^ア セミ					○	○		○	○																○
カ ^ア ラヒワ		○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
キ ^ア ジキ								○	○	○						○									
キ ^シ						○						○													○
キ ^シ ハト		○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
キセキレイ					○	○		○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ク ^サ ジキ																									
ク ^イ サキ										○	○	○			○										
ク ^カ モ		○	○		○	○		○	○																○
ク ^ケ ラ		○	○			○		○	○				○												○
ク ^サ キ		○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ク ^シ ユケイ						○																			
ク ^チ ト ^リ										○															
ク ^サ コ ^イ								○	○	○	○	○	○	○	○	○									
ク ^シ ユウカ ^ワ		○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ク ^シ メ			○	○																					
ク ^シ ヨウヒ ^タ キ		○	○																						
ク ^シ ロト ^リ		○																							○
ク ^シ ス ^メ		○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ク ^セ ク ^ロ カ ^モ メ		○	○		○	○		○	○																○
ク ^セ ク ^ロ セ ^キ レイ		○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ク ^セ ク ^カ			○			○		○	○	○	○	○	○	○	○	○									
ク ^タ イ ^サ キ		○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ク ^タ ア ^シ キ																									

かも知れませんが、日常的なことだからこそ、市民同士での交流になると考えています。また、日常におなじ生活空間に生活しているからこそ、理解できることもあると思います。

その意味では市民が市民に本当の情報を提供し市民同士が関心を深め理解していくために、そのような機関とか、場が必ず必要になる時がやってくると考えています。

〔専門的な機関との連係〕

私達福生市民が福生の自然を観察・記録するという意味は、身近な自然が私たちに与えている有形無形の影響や変わりゆく状況などが、私達の日常生活とどのような関係があるのかということを考える機会になると思うからです。

そのために、自然の様子を観察記録することは、一つの手段になるわけです。

しかし、この手段は現在を記録するしかできませんので、毎日・毎週・毎年の記録の積み重ねが、将来に過去としての現在を理解するしかできません。そして私達人間は、現在のわずかな変化には鈍感ですが、目に見える大きな変化には「たいへんだ！」と敏感に対応します。しかし、わずかな変化が大きな変化の前兆であるということを見抜くには、大変な知識と経験が必要になるでしょう。

私達市民が日常生活を営みながらも、各自が出来る範囲

で観察し記録していくわけですから、専門家チームが調査を行なって記録を出すというレベルと同じ結果を求めるわけにはいかないと思います。そのような意味では、私たちの能力や人的な問題からも限界があり、そのことを頭の隅に置きながら身近な自然を市民のレベルでなければできない方法や視点で記録していくつもりです。

しかし、身近な周囲の自然だけを見てその範囲だけを理解しておしまいというのでは、現在の私たちの生活そのものを理解することはできないと思います。というのは、現在生活必需品のほとんどを輸入に頼っている我が国では、世界の流れの中での環境の変化が大きな生活不安に直結することが、今後ますます多くなると考えられるからです。

日常のレベルでしっかりとした観察をすることから自分の暮らしを見直し、そして西多摩や三多摩レベルの問題も把握し、最終的には地球環境そのものを理解し、自ら判断を下し、そして行動が起こせるような市民になりたいと一歩ずつ歩みを進めていく必要があると考えています。

より確かな知識と判断を下せるようになるには、私たち一人ひとりがより確かな情報を得る必要があります。そのためには、野鳥で言えば「日本野鳥の会」「山階鳥類研究所」など、専門的な知識や能力の蓄積してある機関との関係を緊密に保っておく必要もあると考えています。

これらの不断のおこないが、付加価値が付いた情報とし

て市民同士が共有ができるようにすれば、意味のはっきりした観察になるでしょう。観察は堅苦しいものだけではなく、楽しい部分があるのですが……。

(いとう・せいいち 福生自然観察グループ 加美平在住)